

I. 導入

おはようございます。先週、神が主権と愛をもってすべてのものを支配してくださるという話をしました。箴言16:9はこう教えます。「人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。」私たちは皆、神の御手の中にあります。愛に満ちた神の気配りに感謝します。

使徒23章では、40人の熱心なユダヤ人がパウロを殺そうと企てました。千人隊長はそれを知り、嚴重な警備をつけてパウロをカイサリアに送り出しました。当時、カイサリアはユダヤ属州の首都でした。パウロはそこで総督フェリクスのもとに連れて行かれました。フェリクスは、告発者が到着してからパウロを尋問すると言い、それまでパウロはヘロデの官邸に留置されることになりました。いろいろなことがありましたが、パウロは常に神の御手の中にいました。



では、使徒24:1-23を読んで、フェリクスによるパウロの裁判の成り行きを見てみましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録24:1-23, 新共同訳)

24:1 五日の後、大祭司アナニアは、長老数名と弁護士テルティロという者を連れて下って来て、総督にパウロを訴え出た。 24:2 -3パウロが呼び出されると、テルティロは告発を始めた。「フェリクス閣下、閣下のお陰で、私どもは十分に平和を享受しております。また、閣下の御配慮によって、いろいろな改革がこの国で進められています。私どもは、あらゆる面で、至るところで、このことを認めて称賛申し上げ、また心から感謝しているしだいです。 24:4 さて、これ以上御迷惑にならないよう手短かに申し上げます。御寛容をもってお聞きください。 24:5 実は、この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の主謀者であります。 24:6 この男は神殿さえも汚そうとしましたので逮捕いたしました。 24:6 (†底本に節が欠落 異本訳 <24:6b-8a>) そして、私どもの律法によって裁こうとしたところ、千人隊長リシアがやって来て、この男を無理やり私どもの手から引き離し、告発人たちには、閣下のところに来るようにと命じました。 24:8 閣下御自身でこの者をお調べくだされば、私どもの告発したことがすべてお分かりになるかと存じます。」 24:9 他のユダヤ人たちもこの告発を支持し、そのとおりであると申し立てた。

24:10 総督が、発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が多年この国民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。 24:11 確かめていただければ分かることですが、私が礼拝のためエル

サレムに上ってから、まだ十二日しかたっていない。 24:12 神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見た者はおりません。

24:13 そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げる事ができません。 24:14 しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則したと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。 24:15 更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。 24:16 こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。

24:17 さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。 24:18 私が清めの式にあずかってから、神殿で供え物を献げているところを、人に見られたのですが、別に群衆もいませんし、騒動もありませんでした。 24:19 ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。 24:20 さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。 24:21 彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」

24:22 フェリクスは、この道についてかなり詳しく知っていたので、「千人隊長リシアが下って来るのを待って、あなたたちの申し立てに対して判決を下すことにする」と言って裁判を延期した。 24:23 そして、パウロを監禁するように、百人隊長に命じた。ただし、自由をある程度与え、友人たちが彼の世話をすることを妨げないようにさせた。

III. 教え

パウロの告発者たちはカイサリアに来て、総督フェリクスに謁見しました。この一件がユダヤ人にとって重要であったことは明らかです。長老たちに加え、大祭司が弁護士まで連れてやってきました。使徒24:2aで、弁護士が告発をはじめました。「パウロが呼び出されると、テルティロは告発を始めた。」テルティロの弁論の前半は、おべんちゃらです。総督フェリクスのおかげで平和と改革が進み、ユダヤ人は深く感謝している、とテルティロは言います。

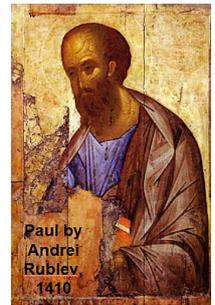


歴史の記録から判断すると、この弁護士の媚びとはまったく異なるフェリクスの姿が浮かび上がります。フェリクスは、皇帝と友人であった兄弟の口利きで総督の職に就きましたが、後に不正が見つかり、職を奪われました。フェリクスは、ユダヤ人にもローマ人にも評判が良くなかったようです。ローマ帝国の歴史家タキトゥスは、フェリクスを「無慈悲と欲望の主君」と呼びました。(同時代史5.9).

お世辞は良いものではありません。とくに、法廷には似つかわしくありません。弁護士がお世辞を手段に裁判官に取り入ろうとするなら、おそらく十分な証拠が揃っていないでしょう。この場合、フェリクスにごまをすった後、テルティロはどのような証拠を提示したでしょう。なにも提示しませんでした。使徒24:5-6で、このように述べています。「**実は、この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の主謀者であります。24:6 この男は神殿さえも汚そうとしましたので逮捕いたしました。**」これは証拠ではありません。ただの告発です。テルティロは、パウロに対する告発の証拠をひとつも提出しませんでした。文書一枚も、証人のひとりもなかったのです。

とは言え、テルティロには作戦がありました。使徒24:8で、彼は総督フェリクスにこう言います。「**閣下御自身でこの者をお調べくだされば、私どもの告発したことがすべてお分かりになるかと存じます。**」つまり、パウロに供述させよとフェリクスに言っているわけです。これは、テルティロが何も証拠をつかんでいないことの現れです。この訴えに関して有罪と思わしき発言をパウロがしてくれるのをただ願っていたのでしょう。いっしょにいたユダヤ人もこの告発に同調しましたが、パウロが悪事を働いているのを目撃したという者はひとりもいませんでした。

フェリクスがパウロに答弁の機会を与えると、パウロはへつらうことなく、ただ事実を述べました。12日前にエルサレムに着いたばかりで、何も悪いことはしていない、という内容でした。使徒24:13で、パウロはこの告発について証拠がない点を指摘します。「**そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げることはできません。**」パウロがエルサレムに到着して間もないという事実は重要なポイントでした。というのも、捜査が簡単なはずだからです。パウロが何らかの悪事を働いたのであれば、その目撃者が容易く見つかったはずですが、ユダヤ人は証人をひとりも連れてきていませんでした。パウロが最初に捕えられた神殿での騒動に居合わせた人は、誰もカイサリアに来ませんでした。おそらく、来てくれる人がいなかったのではないのでしょうか。もし来れば、正当な理由もなくパウロに襲いかかったことを認めざるを得なくなるからです。



使徒24:17で、パウロはエルサレムに来た実際の目的を話します。「さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。」これは、使徒言行録ではここまで明かされていませんでしたが、パウロの書簡に記されています。一例を挙げると、ローマ15:25-26でパウロはこう記しました。「**15:25** しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。**15:26** マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。」

パウロは裁判にかけられても、イエスを信じる信仰について語るチャンスを逃しませんでした。使徒24:14-15「**24:14** しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則したと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。**24:15** 更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。」ここでもパウロは復活を強調します。また、この道と呼ばれるキリスト教信仰が新興宗教でも分

派でもないことを明らかにします。ローマ帝国の支配下では、政府の許可なしに新しい宗教を広めることは法律で禁じられていました。イエスの死と復活の教えは、新しい宗教ではありません。ユダヤ教信仰の完成を知らせるものです。イエスは、旧約聖書である律法と預言書に約束されたメシアです。キリスト教がユダヤ教から分かれたのは、ユダヤ教の指導者がイエスをメシアとして認めようとしなかったからです。

使徒24:22 「フェリクスは、この道についてかなり詳しく知っていたので、『千人隊長リシアが下って来るのを待って、あなたたちの申し立てに対して判決を下すことにする』と言って裁判を延期した。」先週の学びで見たように、総督フェリクスは、リシアからの手紙を受け取っていました。その手紙には、パウロが無罪であるとはっきり書かれていました。フェリクスには、判決を先延ばしにする正当な理由はありませんでした。ところが、証拠なしに不当な判決を出すことも、パウロを釈放してユダヤ人指導者たちを怒らせることも避け、フェリクスは判決の先送りという選択をしました。24章の残りを読むと、フェリクスはパウロの判決を2年間も持ち越し、後任の総督にこの件を引き継ぎました。

IV. 聖書朗読 (使徒言行録24:24-27, 新共同訳)

24:24 数日の後、フェリクスはユダヤ人である妻のドルシラと一緒に来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスへの信仰について話を聞いた。 24:25 しかし、パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すと、フェリクスは恐ろしくなり、「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする」と言った。 24:26 だが、パウロから金をもらおうとする下心もあったので、度々呼び出しては話し合っていた。 24:27 さて、二年たって、フェリクスの後任者としてポルキウス・フェストゥスが赴任したが、フェリクスは、ユダヤ人に気に入られようとして、パウロを監禁したままにしておいた。

V. 教え

総督フェリクスがたびたびパウロと話したというのは興味深い事実です。もちろん、賄賂を期待する下心があったのも確かですが、妻のドルシラまで同席させて一緒にパウロの話聞いたことは説明がつきません。もしかすると、心のどこかでフェリクスはイエスを信じたいと思っていたのかもしれませんが、しかし、聖書の記録からは、フェリクスがイエスを信じる決心をしたという記述はありません。パウロの判決を先送りしたように、イエスを信じる決心も先送りしたのです。



ドルシラの存在も、フェリクスが罪を悔い改めるのを妨げた可能性があります。フェリクスはドルシラと結婚するために、一人目の妻と離婚しました。このドルシラは、悪名高いヘロデ一家の姫です。シリアのエメサ王の妻でしたが、フェリクスが美しい彼女に一目ぼれし、夫を捨てて自分のもとに来るようそそのかしました。ドルシラは弱冠二十歳という若さで、宮殿で繰り広げられる陰謀の数々を目にし、彼女自身も純真無垢とは言えませんでした。

使徒24:25 「しかし、パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すと、フェリクスは恐

ろしくなり、『今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする』と言った。」 この一節前には、パウロがイエス・キリストへの信仰について語ったとあります。この箇所は、パウロが正義や節制、来たるべき裁きを強調したことを示します。パウロは説得力のある説教者でしたから、フェリクスは自分が救いを必要とする罪人であることをしっかり理解したはずですが、フェリクスは恐ろしくなりましたが、罪を悔い改めてイエスの赦しを受け取ることはしませんでした。決心するのを先延ばしにしたのです。罪の快樂におぼれる者には、悔い改めるのに都合のよい日はありません。

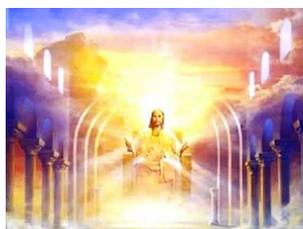
パウロがフェリクスとドルシラに語った詳しい内容はわかりませんが、彼の話したであろう内容は想像できます。正義については、イザヤ書64:5のみことばを引用したかもしれません。「わたしたちは皆、汚れた者となり／正しい業もすべて汚れた着物のようになった。わたしたちは皆、枯れ葉のようになり／わたしたちの悪は風のように／わたしたちを運び去った。」



節制については、ガラテヤ5:22-23aで記されたような内容を語ったかもしれません。「5:22 これに対して、霊の結ぶ実はいは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、5:23 柔和、節制です。」

来たるべき裁きについては、マタイ25:31-33から、イエスの言葉を引用したかもしれません。

「25:31 人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。25:32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、25:33 羊を右に、山羊を左に置く。」



フェリクスは、自分が正義でないことも節制を欠いていることもわかっていました。若いドルシラを見ると、欲望をコントロールできない彼自身の罪深さを思わずにはいられなかったでしょう。フェリクスは、自分が山羊であることを知っていました。イエスが山羊に下された裁きは、自分に対するものだということがわかっていました。マタイ25:46、「こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」



パウロはこのようなトピックを取り上げて教えました。その際、聞き手に必ず希望を残したと思います。イエスを信じる者すべてに与えられる無償の救いについて常に熱く語ったからです。

ローマ3:21-24「3:21 ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。3:22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる

者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。 3:23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、 3:24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」

VI. 結び

十字架上で、イエスはご自身を信じるすべての者の身代わりとなって命をおささげになりました。イエスの血潮は私たちの罪を洗い流します。私たちが信じるなら、永遠の命という無償の賜物をいただきます。パウロがフェリクスとドルシラに語った際も、イエスの福音をはっきりと説明したでしょう。罪を悔い改めて、イエスを信じるようにと勧めたことでしょう。自分が告げ知らせる内容について、十分な根拠も示したはずです。ふたりは2年もパウロとたびたび会っていたのですから、決心するのに十分な時間がありました。

パウロの教えにドルシラがどう反応したかはわかりませんが、フェリクスは来たる裁きを恐れていたことがわかります。フェリクスは、自分の罪を赦していただく必要があることを知っていました。それでも、イエスを信じる決心をしなかったようです。残念ながら、フェリクスがしたのは、決心を先送りにするという選択でした。もっと都合のよい日が来ればそうしようというわけです。フェリクスは、物事を先延ばしにする人で、そのせいで救いの喜びを逃してしまいました。私たちはフェリクスを反面教師とするべきです。著名な4世紀の神学者ヒッポのアウグスティヌス（絵画：アントニオ・ロドリゲス）は、次のように警告しました。「神は悔い改める者を赦すと約束してくださったが、先延ばしにする者に明日を約束してはくたさらない。」この警告を心に留めましょう。



昨日は過去、明日は未知です。私たちに与えられているのは今日のみです。コリント第二 6:2 「なぜなら、／『恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた』と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。」

今日は救いの日です。救われる方法は複雑ではありません。難しくもありません。実はとてもシンプルです。パウロは、ローマ10:9と10:13で、次のように説明しました。「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」 「『主の名を呼び求める者はだれでも救われる』のです。」

祈りましょう。

VII. 祈り